

牛久：学校周辺に見る自然

第43号 ひたち野西近隣公園

2011年10月10日発行

＜ 残暑厳しい水辺公園を歩く ～その3. 木の実も育っています＞

残暑の水辺公園。今回は、木の実に注目。昨年、4年生の皆さん（現5年生）と楽しんだアキグミは、今年はまだ実の着きがよくありませんが、どんぐりをはじめ、たくさんの木の実が大きく育ち熟し始めています。まずは、鳥たちが好んで食べる木の実から。鳥たちは、多くの昆虫が感じるこ



とのできない「赤」を見分けることができ、色彩感覚にすぐれています。そのため、鳥に実を食べてもらうことで、糞（ふん）の形で種子を運んでもらっている植物たちの果実は、熟すと赤色になるものが多く、他

には写真のコムラサキのような紫や、サワフタギの青など、やはりめだつ色をしています。広場から池に向かって歩き、パッと見上げて目についたのが、ゴンズイの赤でした。さらにゆるい坂をおりると、左手にコブシの実が割れて、赤い種子が顔を出していました。落ちている実があったら、種子をつまんで静かに引っぱりだしてみましよう。細い糸のようなものがつながつて出てきます。落ちなければ、種子はこの糸にぶら下がり、鳥たちを誘っていたことでしょう。



赤い果実と、熟して顔を出した黒い種子とのコントラストが美しいゴンズイ（ミツバウツギ科：左上）。

「にぎりこぶし」のような果実が割れて、赤い種子が現れたコブシ（モクレン科：右上）。

枝のもとの方の果実から、だんだんと紫色に色づいていくコムラサキ（クマツツラ科：下）。



広場から池のまわりの道において、遊具のある方へ歩いていくと、あずま屋の少し手前にヌルデが枝を広げています。熟すと白い粉を吹き、鳥がこれで塩分補給をするそうです。なめてみると、確かにしょっぱいような、すっぱいような味がします。リンゴ酸カルシウムという物質で、調味料として利用したこともあるそうです。ただし、樹液でかぶれる人もいます。肌は敏感な子は特に注意しましょう。



ヌルデの白い花が咲いて（下）1週間後、若い果実はかっ色を帯びてきました（上）。

他のウルシ科植物と比べれば、それほど強くはありませんが、樹液に触れるとかがぶれることがあります。



↑大きく育ったが、まだ緑色のコナラのどんぐり。

コナラやシラカシのどんぐりはまだ緑色をしたものが多いですが、クリやクヌギは10月に入ってもう落ち始めています。また、コナラやシラカシは今年の春に咲いた花が実になっていますが、クヌギは昨年（去年）の春に咲いた花が、今になって熟しています。ざぶとん（穀斗：かくと）のもようもそれぞれで、同じように見える「どんぐりのなる成る木」も、よくかんさつ観察すると、いろいろと違ってきます。22年度46号でも説明しましたが、またきかい機会をみて、「どんぐり特集」でも組んでみようかと思っています。



←大きなクリの実ができる木（左）と、小さいクリの実ができる木（右）があります。

大きい方は、たぶん後から植えたものでしょう。小さい方は、もともとの林に育っていたのではないかと思っています。



果実についたつばさ翼で、風によって運ばれていく種子もあります。左のシデ類もそうです。公園にはアカシデとイヌシデの両方がみられますが、どこが違うか分かりますか？写真では小さくて分らないと思いますが、ヒントは果実についた翼の形と、葉の脈です。機会があれば、実物で確かめてみましょう。よく似たアカシデ（左）とイヌシデ（右）。実につく翼の形と葉の側脈の数が違う。



↑公園内の、背の高いネムノキ。マメのさやは、緑からかっ色に変わってきました。

しんようじゅ針葉樹の実（実）は、正しくは「果実」と呼べませんが（中学校で学習します）、サワラの実が、大きくなっていました。中ではつばさ翼をもった種子が育っているはず（はず）です。【理科支援員 宮内】

大きく成長したサワラ（ヒノキ科）の実→

